

児童画における太陽の意味

熊田 藤作

(平成4年10月1日受理)

The Meaning of the Sun in Pictures Drawn by Children

Tosaku KUMADA

(Received October 1, 1992)

1. 研究の目的と方法

(1) 研究の目的と仮説

幼児や小学校低学年の児童のかいた絵を見ると、円の回りに無雑作に赤で放射状に線がきした太陽がかかっている絵を多く見る。都内八王子市立A小学校1年生の「どうぶつえんにいったときのこと」という遠足の絵の場合では、56人中46人の82%の児童が空をかき、そこに太陽をかいていた。

しかし、この八王子市立A小学校の児童が動物園に遠足に行った日は、太陽が出ている晴天の日ではなく、曇天の日で、その上、帰りには小雨もばらつくような日だったという。それなのに、子供たちのかいた82%の絵に、何のためらいもなく太陽がかかれていたのである。このように、その時の状況とは関りなく、低学年の児童がかいた絵の多くに太陽がかかれるのである。このような現実から、「児童は何故太陽をかくのか」。このことを明らかにしてみたい、というのがこの研究の第1の目的である。

第2の目的は、先に述べた八王子市立A小学校のような例は、小学校2年及び3年の前半頃まで普通続くが、以後だんだん減少し、4年以降ではほとんど見られなくなるのであるが、この原因は何か、を探索することである。しかし、この減少の理由は、児童の成長に伴う自然現象ばかりでなく、他から何らかの干渉によるものではないか、という気がする。そこでその有無が、あるとすればどんな干渉があるのか、その実態を明らかにし、「児童は何故太陽をかかなくなるのか」、それを明確にしたい。そして第3の目的は、「児童が太陽をかくこと

児童学科 造形教育研究室

の必然性を検証する」ことである。

そして更に、第1、第2、第3の調査研究の総合から、「児童が太陽をかくことの正常性と有効性の論拠の確立」をし、これをこの研究の仮説とする。

(2) 研究の方法と順序

寡聞にしてこの種の研究があることを知らず、資料らしいものは見当たらない。したがって、第1、第2、第3の目的に即して、次のような調査研究の方式で研究を進めることにした。またこのような方法を取ることにしたのは、独断に落ち入らないようにということもある。

まず第1の目的に即しては、小学校1年から6年までの児童に、・絵をかく時によく太陽をかくかどうか、・よくかくと答えた児童にはその理由を、・かかないと答えた児童にもその理由を、文章記述方式でアンケートし、これを分析・考察することにした。

第2の目的に即しては、第1の目的と同じ方式で、・絵の中に太陽をかいて、誰かに何かを言われたことがありますか、・それは何年生の時ですか、を調査し、この調査結果から糸口を探る。

第3の目的に即しては、児童の太陽への思いを別の側面からも推し計ることも必要と考えて、・絵本の絵の中で太陽が出ている絵を見た時どう思うか、また短大生には、・今でも絵をかく時に太陽をかきたいと思う気持があるか、などを前の二つの目的と同じ方式で調査し、分析・考察する。

2. 調査と考察

(1) 児童は何故太陽をかくか

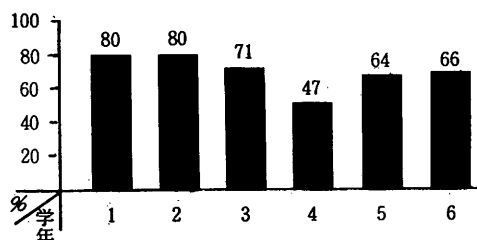
◆ アンケートI

- えをかくときに、おそらにおひさまを、よくかきますか。
- かくとこたえたとにききます。どうしてですか。
- かかないとこたえたとにききます。どうしてですか。

調査人数、1年=56人、2年=51人、3年=45人
4年=59人、5年=53人、6年71人
他の調査も同人数で実施

① 太陽をかくと答えた児童の割合と理由

表1. よくかくと答えた児童の割合



この調査をするに当って、このアンケートは、「教室の外のことを絵にかく時のことです」、と口頭で児童に説明した。

表1を一瞥すればわかるように、1年、2年では、正に80%の児童が太陽をかき、1年から6年までの平均でも68%の児童が太陽をかくという割合が出た。1年、2年の割合については予想もできし納得もできるが、平均で68%という割合は意外だった。それに5年、6年の64%、66%という高率には驚きである。

しかし現実には、5年、6年の児童の中でこのように多くの児童が絵画表現時に太陽をかいているだろうか。児童の絵画表現活動の授業を見る機会が少なくないが、このような経験からは考えられないことである。それでは、この謎をどのように解いたらよいだろうか。一つの視点としては、児童は現実にはかいていないにしても、心情的にはかいているような気持ちになっているのだろうか。だとすると、児童の心の中には、発露されない状態ながらも、「太陽をかきたい」という気持ちがわだかまっているということになる。これらの学年で、実際どの位太陽がかかっているのか、改めて調べてみなくてはならないだろう。

また、もう一つの意外というか、理解に苦しむのは、

4年の割合が、前の学年の3年と著しく違うということである。同じ地域の同じ学校の児童でありながら、このように前後の学年とのつながりや1年から6年までのカーブから外れるというのは、何を意味するだろうか。考えられることは、担任教師による、児童の太陽表現についての干渉があるのではないかということである。

表2. よくかくと答えた児童の理由と割合 (%)

理由 \ 学年	1	2	3	4	5	6
おひさまがすき	20	6	9	3	11	0
おてんきがすき	13	18	22	10	0	19
【明るい・きれい かわいい	9	12	16	32	32	29
【空に見える ふんいきがでる	0	22	0	22	0	0
なんとなく	0	37	31	0	11	17
時々かく	2	0	9	0	29	4
その他	20	5	6	16	12	9
無回答	36	0	6	19	6	23

さて、表2を見ながら、児童が太陽をよくかくと答えた理由について、学年ごとの分析と考察を試みてみる。

ア、1年が答えた理由について

1位=無回答、2位=おひさまがすき、その他、3位=おてんきがすき、4位=明るい・きれい・かわいい、5位=時々かく、の順位と内容。

順位に従って、この順位と理由の内容の関係について考察してみる。1位の「無回答」については、1年生が太陽をかき理由はと問われても、「そんなことわからない」「かきたいからかくんだもん」という思いでの無回答ではないかと考える。したがって、「おひさまがすき」と同じ意味での「無回答」と理解してもよいだろう。1年段階では、発達段階的にこのような理由を求めてのアンケートは、少し無理なのかもしれない。

2位は「おひさまがすき」と「その他」である。「おひさまがすき」については、当然といえば当然の反応であると考えられる。それは、幼児及び低学年の児童の生活の主体は遊びであり、この遊びは「おひさま」あるいは「おてんき」によって保証される。そのような意味で、子供の心とおひさまは切っても切れない関係にあるからである。また「その他」は、他の6項目に類しないものをまとめたので、当然この程度の割合になるだろう。た

だ特記しておかなければならないのは、「いえではかく」というのが4%含まれているということである。何故家ではかくが学校ではかかないのだろうか。この反応に問題がかくされているような気がする。

他に「おてんきがすき」は、「おひさまがすき」と同類の心情であると捉えたい。「明るい・きれい・かわいい」の反応も、「おひさまがすき」の具体化された心情と解してよいだろう。

イ、2年が答えた理由について

1位=なんとなく、2位=空に見える、3位=おてんきがすき、4位=明るい、5位=おひさまがすき、の順位と内容。

1位の「なんとなく」は、1年の無回答と同類の反応で、「理由などわからない」ではないだろうか。以下2位、3位、4位の割合が1年より高くなっているが、これは児童の認識力の向上を表しているのではないだろうか。というのは、これらの項目名は、「おてんき」「明るい」「空に見える」というように、視覚的で具体的な意味を帯びているということからである。

「時々かく」「無回答」が0%で、「その他」が5%というのは、このアンケートへの反応時に、担任から「考えをはっきり表しなさい」とやや、強制されたきらいが無きにしもあらずの感じがする。なお「その他」の内容は、「一人でかくとときにかく」というものである。これも、何故一人以外の時はかかないのか、という疑問が残る。

ウ、3年が答えた理由について

1位=なんとなく、2位=おてんきがすき、3位=明るい、4位=おひさまがすきと時々かく、5位=その他と無回答、の順位と内容。

「なんとなく」が1位であるが、これはどのような意味あいでの割合が高くなったのだろうか。他の反応項目との関係を見ると、表2の上から3項目の割合が揃って高いので、この学年も“かくのが当然”という意味あいでの「なんとなく」という気がする。また、「おひさまがすき」より「おてんきがすき」の割合が高くなっているのは、心情面での捉え方より現象的な捉え方に移行し、児童が成長していることを物語っているのだと思う。そして、「空に見えるの項」の割合も高くなっているのも、これと同じ意味あいからであろう。次に2位の「おてんきがすき」は、ギャング・エイジとも呼ばれるこの時代の児童の特徴は、“活動的”というのが設定である。

したがって、この特性を満足させるためには、活動の“場”を保証してくれる“お天気”は一大関心事である。そのような意味で、この項の割合が高いのだと捉えたい。

なお、「その他」の理由の内容であるが、この学年でも「かきたいときはおうちでかく」というのがあった。どうしてかきたい時は家だけでかくのだろうか。1年、2年で特記事項とした内容の反応がこの学年にもある。エ、4年が答えた理由について

1位=明るい、2位=空に見える、3位=無回答、4位=その他、5位=おてんきがすき、6位=おひさまがすき、の順位と内容。

この学年の反応については、「かく」と答えた児童の割合が前後の学年とのつながりから見て、異状に低いのであるが、このことも関連させながら考察しなければならないだろう。この前後につながらない割合が出た原因については、担任教師による干渉的指導によるものではないかと表1の考察の時推測したが、この表2に現れた理由の内容と割合を見て、一層その感を深くした。

それは、「明るい項」と「空に見えるの項」が、他の項の割合より大変高いということからである。つまり、この二つの項の特徴は、両者とも視覚的で造形的であり、その捉え方は4年生としては大人びてはいないかと思うからである。そして更に「その他」と「無回答」の項の割合が高い。これは、干渉的指導に対しての心情的抵抗の現れではないかと見る。1年もこの二つの項は高い割合だったが、その意味は違うものだろうと考える。

しかし、「おひさまがすき」とか、「おてんきがすき」のところに児童の反応があるのを見て、いささか救われる気がする。ここでも「その他」の中に「家ではかく」とあるのは、この調査研究の目的からして特記事項である。

オ、5年が答えた理由について

1位=明るい、2位=時々かく、3位=その他、4位=おひさまがすき、5位=無回答の順。「明るい項」が1位なのは、5年生段階としてはうなづける反応である。表2の上から1段、2段の項は、心情的な意味あいを持つものに対して、「明るい項」は視覚的・感覚的であり、5年の発達の特性に合致した反応だからである。次の2位が「時々かく」であるが、その半数が「家では時々かく」である。これは興味深いことで、かきたい欲求がありながら人前ではかかず、隠れてかくということだろう。どうしてこのように、かきたく

でも太陽は人前ではかかないという思いと気持があるの
だろう。これも特記事項である。

なお、「その他」のところでは、「ふんいきがでる」
「ないとおかしい」というのがあった。これは、太陽が
あってはじめて景色らしくなるということと、屋外をか
いた絵の場合は、「太陽がないとおかしい」ということ
のようである。

「なんとなく」と「無回答」のこの程度の割合は、正
常数値と解してよいだろう。

カ、6年の答えた理由について

1位=明るい、2位=無回答、3位=おてんきがすき、
4位=なんとなく、5位=その他、6位=時々かく、の
順位と内容。

この学年では、「家ではかく」という内容の反応はな
かった。1位が「明るい」の項であるが、これは5年の
ところで述べたように、高学年の対応としては正常の反
応ではないだろうか。また、2位が「無回答」なのもう
なづける。これは、6年段階として、太陽をかくこと
について、理由などを言うことは今更という“照れ”では
ないかと推察する。

それに、「おひさまがすき」と「おてんきがすき」は
似ているようで違うニュアンスのものであろうが、前者
への反応ゼロで後者にだけ反応したのは、かなり思考力、
認識力が成長した6年生の反応としてうなづける。また
「空に見えるの項」に反応なしであるが、これも、日の
出や夕日は見えるとしても、日中の太陽は実際は見えない
ものだろうから、6年らしい反応といえるだろう。

キ、総合しての考察

表2の割合の分布を見てみよう。1、2、3年では上
から3段階までの項目に数値が集まっていて、4、5、
6年では、3段階だけに高い数値のつながりが見られる。
これは、3年以下では、太陽をかく理由が心情的意味あ
いを持ち、4年以上では、「明るい」という視覚的なそ
して「きれい」という造形的な意味あいをもって太陽と
のつながりを感じ取っているということができそうであ
る。

また特徴的なことは、1年と6年は、高い割合で「無
回答」をしていることである。この「無回答」の意味は、
“当惑”と“照れ”ではないかと推測し、大きく意味が
違うということである。

ところで、1年から6年まで通して反応のあった項目
は、「おひさまがすき」の項目と、「明るい・きれい・

かわいい」の項目と「その他」の項目である。これを見
ると、児童の心と太陽との関わりは、「おひさまが好き」
、「明るくてきれい」という関わりがいちばん強いよう
である。

② 太陽をかかないと答えた児童の割合と理由

表3. かかないと答えた児童の割合

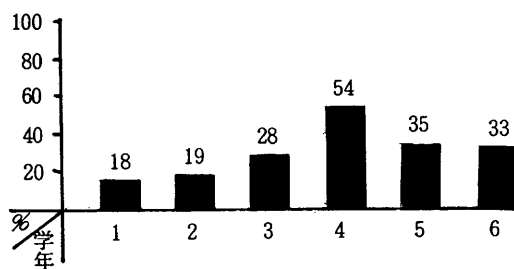


表3の数値は、当然表1の数値の反対になるわけで、
提示の必要もないことも考えたが、結果が出ているし、
確認の意味で提示した。確かに表1の反対の結果となっ
ている。

表4. かかないと答えた児童の理由と割合 (%)

理由 \ 学年	1	2	3	4	5	6
めんどくさい	22	0	0	7	21	20
ださい・へん・ かっこ悪い	0	10	21	27	16	25
赤ちゃんばい	0	0	8	13	42	8
晴れた日の絵 だけでない	0	0	21	13	11	21
他のことをかく スペースがなくなる	0	10	7	7	0	13
なんでもない 理由なし(3年のみ)	11	60	21	0	0	0
わかりません	67	0	7	0	0	0
その他	0	20	15	33	11	13

太陽をかかないと答えた理由の内容は、この調査研究
の目的と重要にかかわる意味を持つものであるので、こ
れは意を尽くして学年ごとに考察してみたい。

ア、1年が答えた理由について

1位=わかりません、2位=めんどくさい、3位=
なんでもない、の順位と内容である。

「わかりません」が67%で、理由の過半数である。1年生では、「どうしてですか」と問われても、「わかりません」と答えるのが当然のようである。①の「かく」の「無回答」のところでも述べたように、この時期の発達の特性からして、自分の行為に意味づけをして行動するまでに成長していないからである。したがって「かかない」しかし理由を聞かれても「わからない」というところだろう。

「めんどくさい」22%については、いささかの考察が必要のようである。それは、この理由は児童にとっては何らかの理由があるのだが、それを言うのが嫌でこう答えた児童と、本当に「めんどくさい」でこう答えた児童の両者があるように思う。最近の児童の中には、後者のような児童が意外に多いのである。「なんでもない」の11%の児童は、「わかりません」と同類の児童ではないだろうか。

イ、2年が答えた理由について

1位=なんでもない、2位=その他、3位=ださいと他のものをかく、の順位と内容。

「なんでもない」の60%は、1年の「わかりません」と同じような意味ではないかと解釈する。ただ、本当はかきたいのだが、何らかの理由で、本心を隠すための「なんでもない」もあるような気もする。次に「その他」の20%の内容であるが、具体的に理由を挙げると「つまんない」「かくと先生におこられる」である。もう二年生段階で、教師からの干渉がはじまっているのである。このようなことがあるので、「なんでもない」のところは特に考察を加えたわけである。

次に各10%の「ださい」と「他のことをかくから」という反応の理由であるが、これらも、教師や親などからの干渉の経験があって、このような反応になっているのではないかという気がする。

ウ、3年が答えた理由について

1位=ださい、晴れた日だけでない、理由はない、2位=その他、3位=赤ちゃんばい、4位=スペースがなくなる、わかりません、の順序と内容。

1位の「ださい」「晴れた日の絵だけでない」「理由はない」などの理由は、3年段階の特徴的反応のように思う。それは、太陽を絵画表現の中にかくことは、「赤ちゃんばい」、「ださい」という一般的風潮の洗礼を受けたと仮定すると、3年段階になるとその意味をある程度理解でき、それにもとづいて対処する態度も育ちはじ

めているからである。

「その他」の内容は、親と教師に、「いつまでも太陽かいているのはおかしい」といわれたというのである。エ、4年が答えた理由について

1位=その他、2位=ださい、かっこ悪い、3位=赤ちゃんばい、晴れた日だけではない、4位=めんどくさい、スペースがなくなる、の順位と内容。

この学年が、54%という過半数の児童がかかないと答えた学年である。そこでこれに対して、教師から干渉指導があったからではないかと考察したが、やはり「その他」の内容に、「いやだから(複数)」「かくのがきらいだから」「子供っぽい」など干渉の結果のような反応が見られ、また「お母さんからいわれたから」ともいうのがあった。

そして反応の言葉として、「いやだから」、「かくのがきらいだから」などと他の学年では見られない表現が見られるのは、太陽をかくことに、いささか厳しい干渉があつてのことではないだろうか、という気がする。だとすると、「ださい」に数値が集まるのも当然である。

オ、5年が答えた理由について

1位=赤ちゃんばい、2位=めんどくさい、3位=ださい、へん、4位=晴れた日だけでないとその他。

この5年生の反応は、一般的風潮を素直に反映した反応の仕方ではないかと思う。それは「赤ちゃんばい」に42%の児童が反応したこと、そして21%の「めんどくさい」も1位の「赤ちゃんばい」と同類の心情でありながら、照れでこのように反応したのではないかと考えるからである。そしてこの推測でいくと、「ださい、へん」という反応もこのつながりのようだ。また、「晴れた日ばかりではない」という反応も、この学年程度では、このようなことをいう児童がよくいて、言うことも理解できる。

ただ、「その他」の反応内容は「かきたくない」と「学校ではかかないが家ではかく」で後者は3名もいたということと共に、この小論の課題ともつながる問題である。

カ、6年が答えた理由について

1位=ださい、へん、2位=晴れた日の絵だけではない、3位=めんどくさい、4位=スペースがなくなる、その他、5位=赤ちゃんばい、の順位と内容。

第1位と最下位の5位は、この小論の課題と関連する内容の反応である。そして、2位と4位は理屈をつけた

6年生らしい反応である。3位の「めんどうくさい」は、1位の「ださい・へん」と関連した「照れ」の現れではないだろうか。

「その他」の内容も6年生らしい「月の方が好き」「今までかいてあきた」「晴れた日ばかりではない」などの、多少理屈をつけたような内容ばかりである。

キ、総合しての考察

表4を見渡しての反応の分布であるが、まず目につくのは、上から2段目の項の「ださい、へん、かっこ悪い」である。次につながる学年が多く比較的高い数値に示しているのは「赤ちゃんばい」である。そしてその次は「晴れた日の絵だけではない」となる。

ここでの本質的な問題は、この3項目の反応に集約されているのではないか、という気がする。というのは、太陽をかかない最大の理由の、「ださい、へん、かっこ悪い」は「赤ちゃんばい」が下敷きになった意味と感情を持った語彙で、したがって「赤ちゃんばい」と同意語であろうから、児童はこの二つの言葉から逃れたいという気持と、他人からもそう言われたくないという気持の現れとしての反応であろうということである。また「晴れた日の絵だけではない」については、事実このように思う児童がいることも確かだが、「ださい……」「赤ちゃんばい」と反応することを嫌っての反応の児童も多いと考察する。

他に特徴的な分布が見られるところもあるが、それらは、各学年の考察のところで触れているので、ここでは省略する。

(2) 児童は太陽をかくことに干渉を受けているか

アンケートⅠの結果について、いささか腑に落ちないところがある。それは、私が経験的に把握しているところでは、児童のかく絵の中からは、3年頃からかかれる太陽は減少し、5年、6年では、日の出や夕日にかくようなモチーフ以外はほとんど見られなくなるというのが実態であると思うのだが、アンケートの調査結果によれば、5年、6年でも64%、66%太陽をかくと意志表示しているのである。

このギャップは何を意味するものだろうか。考えられることは、児童の心の中には、かきたいという気持があるにもかかわらず、それを実行することに「ためらい」となるものが働いているのではないかということである。このような思いから、・「ためらい」となるものが働いているかどうか、・その働きとはどんなものか、・その

働きを受けたのは何時か、などを知るために、次のようなアンケートを児童にしてみた。

◆ アンケートⅡ

- ・おひさまをかいて、おうちのひとや、せんせいに なにかいわれたことがありますか。
- ・いわれたことがあるひとは、つぎのことにこたえてください。
- ・ある ・ない（どちらかに○をつけてこたえる）
- ・だれに
- ・どんなことを
- ・なんねんせいのとき

表5 おひさまをかいて何かいわれたことがあるか (%)

内容 \ 学年	1	2	3	4	5	6
あ る	21	31	47	14	26	15
な い	67	64	36	48	38	42
無 回 答	12	5	17	38	36	43

① おひさまをかいて何か言われたことがあるか。

アンケートの結果を見ると、絵の中に太陽をかいて、何か言われたことが「ある」と答えた数値は、予想外に低い。しかし、太陽をかくことへの干渉は、本当にこのようにないのだろうか。「ある」と半数に近い数値が出たのは、47%の3年だけである。これは、3年の時期は、絵の中から太陽が消える境の時期であるので、事実干渉も多く、児童の意識も高いのかもしれない。

ただ問題なのは、「無回答」の内容と数値である。他のアンケートの場合は、このアンケート結果のように、1年から6年までを通じて「無回答」があったことはないし、無回答にしてはこのように数値が揃って高いことはなかった。このようなことからこの無回答の内容を推測すると、「ある」、あるいは「あるに近い」意味を持った「無回答」ではないのだろうか、というような気がする。

もし「無回答」がそのような意味を持ったものだとすると、「ある」プラス「無回答」の割合は、軽く扱えない数値となる。1年、2年が33%、36%だが、3年が64%となり、4、5、6年は52%、62%、58%で過半数以上の割合となる。つまり、この判断が誤っていないとす

児童画における太陽の意味

れば、相当な干渉を受けているということになる。

また、児童の場合は、もし干渉を受けたとすると、自分一人に止めておくことはなく、「お母さんが言った」「先生がこういった」として、それをまわりの友達にまでその意味を求める特性がある。したがって、仮に一人が一人の友達にそれを求めたとすると、3年以上では、その意味がほぼ全員の児童に求められたことになる。

次に、誰にどんなことを言われたのか、そのことを考察してみよう。

表6 おひさまをかくて誰にいわれたか (%)

学年 内容	1	2	3	4	5	6
父	8	7	10	13	36	10
母	50	56	48	38	36	45
先生	25	31	38	38	21	27
兄	17	0	0	11	0	0
妹	0	0	0	0	7	18
祖母	0	6	4	0	0	0

② おひさまをかくて、誰に何と言われたか。

表6を見ての限りでは、児童が絵画表現時に太陽を描くのを見て、何かを言ったのは母親がまず第1である。

1年、2年、3年では50%前後、4年、5年、6年でも40%前後である。つまり約半数は母親ということである。

次は先生(学校の教師)で、6学年を平均すると30%である。この割合から判断すると、児童が太陽をかくことへの干渉は、母親及び教師によることが大部分ということになる。他に、割合としては高くはないが、祖母及び兄弟・姉妹からというのもあったが、これも実は数値以上の効力として作用としているのではないだろうかかと考察する。

それは、先の項でも述べたように、児童は、他から知り得たものをまわりの友達にも広げ求めるものであるが、それへの意識は、「僕のお兄さんは…」とか「私のおばあさんは…」とか兄弟・姉妹や祖父祖母などから知り得たものには、一層その傾向が強いように思うからである。

ただ、この表の読み取りについては、4番目の調査項目ではっきりするが、現時点でのことばかりではないということである。即ち、過去のものも含むということである。

③ どのようなことを言われたか

(○の中の数字は、言われた時の学年)

[1年]

・じょうずだね、(父親)① ・うまい① ・じょうず① ・かわいい① ・なかなかいいね、(母親)① ・うまい(兄)① ・じょうずだね、(幼稚園の先生)④

[2年]

・じょうずだ、(父親)② ・かわいい② ・うまい、おもしろい、(母親)② ・かかないでね② ・おひさまかくと幼稚園みたい② ・すぐかくな② ・かくのだったらてんをかいたほうがいい ・おひさまの形いびつだよ、(小学校の先生)② ・じょうずじゃない、(幼稚園の先生)④ ・かわいい、(祖母)

[3年]

・うまいね① ・もうちょっと大きくかきなさい、①(父親) ・おもしろい ・うまい ・かわいい①、② ・おひさまかいたほうがいい②(母親) ・この太陽かわいいね③ ・太陽はいらぬね①② ・太陽はかかないほうがいい③ ・なんかおひさまかくと幼稚園みたい③ ・光をうき出す感じ(小学校の先生)③ ・うまい(祖母)③

[4年]

・かわいい気持ちいい(父親)③ ・かわいい ・おもしろい③ ・太陽なんていらぬんじゃない② ・おひさまの色は何色(母親)① ・もっといいねに(教師)④

[5年]

・おひさま好きだね② ・まあまあだね③ ・これなんだい②(父親) ・これなんだ② ・赤ちゃんばいね③ ・うまい、じょうず、おもしろい① ・おひさまかあ②(母親) ・うまいね②(友達) ・おひさまかいてんの③(妹)

[6年]

・じょうずだね① ・おひさまはもっと大きいよ① ・どうしておひさまは赤いの⑤ ・おひさまにどうして顔描くの③(母親) ・おひさまに顔描くな④ ・太陽はどうして赤いの⑤ ・とっても上手④(教師) ・へん② ・かわいい② ・おひさまってほんとうは赤じゃないよ⑥(友達)

(下線のある助言は、否定的内容である)

[総合しての考察]

総合的考察としていえることの第1のポイントは、肯定的な言葉かけは、1年から6年までを通してあったと

いうことと、1年では否定的な言葉かけは全くなかったということである。第2のポイントは、太陽をかくことへの否定的な干渉は2年から始まるということ。第3のポイントは、干渉者はほとんど学校の教師と母親であり、教師は2年から干渉を始め、母親は4年から始めるという結果が出たことである。

そして特徴的なことは、1年の時は肯定的な言葉かけばかりがアンケートの反応として出ているが、そこにも教師からのものは皆無ということである。そして2年からの教師の積極的な否定的言葉かけを見ると、1年時は児童が太陽をかくことを黙認しているながらも、基本的には望んでいない気持ちでの黙認であると考察することができる。

それにしても、幼稚園及び1年時には太陽をかくことがほめられ、以後納得する理由も示されないまま、「赤ちゃんばい」、「かくな」、「いつまで太陽をかいているの」、という半暴力的な言葉での中止的干渉には、児童はとまどうばかりであろうと考える。

(4) おひさまをかいて何をいわれたのは何年生の時

表7 なんねんせいのおひさまをかいたとき (%)

時	学 年	1	2	3	4	5	6
	入学前	20	7	0	12	7	18
	1年	70	93	25	25	17	18
	2年	0	0	57	25	25	18
	3年	0	0	10	12	14	0
}	わすれた	10	0	8	26	37	46
	その他						

この調査に対する反応は、1年、2年のように、現時点で反応しているのと、3年以上の学年のように過去にそのようなことがあったとして反応しているのがある。したがって、3年以上の場合には、多少時期的な曖昧さが加味されるかもしれないので、このことを心に止めながら考察してみたい。

さて、1年であるが、現時点で70%。入学前が20%という。これを見ると、太陽をかくことへの干渉は、既に幼稚園時期からあるということになるが、これを先の調査に出たように、幼稚園、1年時の干渉は、肯定的な言葉かけでということである。そして2年は1年時に93%と高率で、3年は2年時に57%と更に4、5、6年では

1年時と2年時がもっとも多く干渉されたとしている。

このようなことから、太陽をかくことへの否定的な干渉は、2年時がもっとも多く、次いで3年時ということになる。

なお、「忘れた、その他」という反応項目があり、そのほとんどが「忘れた」というものであるが、この反応の内実は文言通り「忘れた」と取ってもよいものだろうか。5年、6年が高い数値であることから、「太陽」という語彙への拒否的感情からの反応も含まれて、このように高数値になったのではないかという気もするが、これは偏見だろうか。

(3) 太陽をかくことは幼稚さの現れでない検証

この研究の究極の目的は、児童に太陽を自由にかかせるべきではないかということの検証的研究で、そのために児童が太陽をかく実態と理由、またそれをかかせまいとして干渉する実態と理由を、児童への調査研究の方式で研究を進めてきた。

ところで、そのかかせたくないという理由は、「太陽をかくことは幼児的だから」という理由のようである。それでは、小学生が太陽をかくことは幼児性の現れなのか、これについての調査研究を少ししておきたい。研究の方法としては、児童は、自分がかくことだけでなく、

- ・他の太陽のある絵を見ても魅力を感じるものなのか。
- ・またこの魅力は成長後も魅力として持ち続けるのか。

などの調査研究から、太陽への憧れは幼児性からだけの憧れではないことを立証したい。

また、この太陽の存在は、児童の表現意欲や表現効果ともどう関わるかについても触れることにしたい。

① 児童は他の太陽のある絵にも心引かれるか。

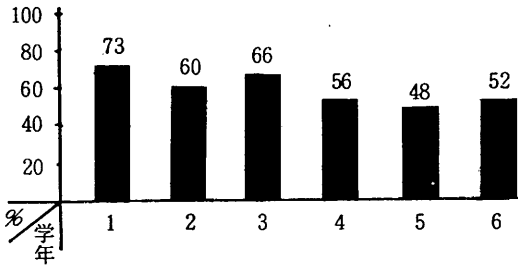
この課題は、自分がかいた絵でなくとも、太陽が出ている絵には、心が引かれるかということである。この課題を児童にアンケートし、その結果から考察してみる。

◆ アンケートⅢ

・えほんにでているえで、おひさまのあるえをみたときどうおもいますか。

表8のタイトルを「太陽のある絵を見た時、いいなあと思った」としたが、児童は「いいなあと思った」という言葉ばかりで反応したわけではない。言葉はいろいろだったが、意味が「いいなあ」に入るものをまとめ、そ

表8 太陽がある絵を見た時いいなと思った数値



れを数値で表した。

次に、反応した言葉と割合を具体的に挙げてみる。

- <1年>・すき(48%) ・きれい(25%)
- <2年>・きれい(23%) ・すき(21%) ・あかるい(16%)
- <3年>・明るい感じ・楽しくなる・きれい(31%) ・場面の感じが出る(22%) ・暖かい(13%)
- <4年>・きれいに感じる(25%) ・空のふんいきが出る(19%) ・かわいい(12%)
- <5年>・明るい感じになる(20%) ・きれいだから(16%) ・かわいいから(12%)
- <6年>・明るく見えて感じがいい(35%) ・楽しい感じ(10%) ・絵の感じが出る(7%)

この調査からわかったことは、児童は自分が太陽をかくという行為を通してばかり太陽を好むのではなく、鑑賞という行為を通して太陽を好んでいるということである。これは貴重な結果を得たことになる。それは、太陽をかくことを幼児性の現れだとする考えは、「太陽図型」は、幼児初期に意味のある形としてかいた一つであるので、それを続けてかくことは、つまり幼児性をそのまま引きづっているという単純な論法での考え方のようである。

しかし、先に児童の反応として言葉の紹介をしたが、それは現時点での実感の伴った意味のある捉え方をしていることがわかるだろう。したがって、児童の太陽への執着は、幼児初期に獲得した図型ということへのこだわりにあるにはあるだろうが、そればかりではなく、幼児自身も成長し、それぞれの成長段階での意味付けを持って太陽に魅力を感じ、その結果としての執着であることがわかる。

とにかく、5年だけが半数に満たないが、他学年は過半数、そして、6学年の平均でも59%の児童が、「太陽

のある絵はいいなあ」と思っているのである。

② 短大生は今も太陽のある絵をかきたいと思っているか

短大生(東京家政大学短期大学部・保育科学生・女子学生のみ)に、今でも太陽へのこだわりを持っているかどうかを聞いてみた。

◆ アンケートIV

- ・今まで、絵をかく時に、太陽をかきたいという気持がありますか。
- ・かきたいと思う人は、どんな理由からですか。
- ・かきたくないと思う人は、どんな理由からですか。

調査の結果は、122人中79人、65%の学生が「ある」である。理由は様々だったが、その理由の中で、代表的意味を持っていると思われるものを紹介してみよう。

ア、絵をかく時に、最初に心に浮かぶものは太陽だから。イ、はればれ、ほのぼの、明るい気持ちになれる。ウ、絵をかく時太陽が必要、いちばん簡単にかけてすてきに見せてくれる。

エ、神秘的で、明るくすてきで、健康的で、自分の心を満足させてくれる。

65%の学生が「ある」と反応したことには、正直言ってびっくりした。しかし、19才～20才の短大生が今なおこれだけ太陽への執着を持っていることから考えて、太陽の魅力は計り知れないものがあるようだ。そして、小学生の持っている太陽への思いと、短大生の持っている思いは、大同小異で、意味が重なることも驚きである。

この結果からも、太陽にはそれぞれの年代に応じたの魅力と憧れがあり、児童が太陽をかくことに対して、簡単に「幼児性の現れである」と捉えるのは誤りであろう。

③ 太陽図型は児童の絵を生かす造形要素である。

図1を見て欲しい。この絵は、小学1年女児がかいた絵である。太陽が微笑み、空には蝶が舞い、山や丘では子供たちと兎が遊んでいる内容である。遠足などで得た経験に、物語のイメージをだぶらせてかいたのだろうか。楽しい感じの絵である。

図2を見て欲しい。この絵は、図1の絵から、左上の空にあった太陽を消した絵である。どんな感じがするだろうか。山の稜線から上の空の空間は物淋しく、二匹の

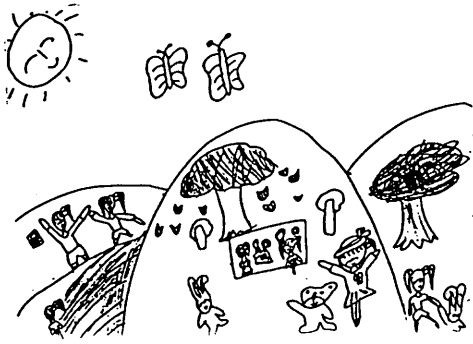


図1 太陽のある絵



図2 太陽のない絵

蝶は図1では飛んでいるようだったが、ここでは、ただぶらさがった感じになっている。つまり空の部分が死んでしまったように見えるのである。

このように、児童の絵画表現において、画面を生かしたり殺したりする効用を太陽は持っているようである。このことは、教育的に大きな問題で、児童の満足感に影響し、創造的教育活動である表現活動への意欲化に関わり、その成果との関係で重大な意味を持つことを見逃してはならないだろう。

3. 児童に自由に太陽をかかせる勧め(まとめ)

(1) 児童の心は太陽と一体化

「えをかくときに、おそらにおひさまをかきますか」「かくひとにききます、どうしてですか」の問いに、表1にまとめたように、それぞれの理由で、多くの児童が「かく」と答えている。そして、「かく」と答えた児童の割合は、1年から6年までの平均で68%である。この数値の高さには大変驚いた。まして、5年、6年の64%、66%は驚異的である。

このように、児童は、自分の絵の中に太陽をかくことを好み、望んでいながらも、他からの圧力干渉によって、中学年以降ではかきたくてもかけない心情を抱き、高学年に至っては太陽を必要とする特定場面をかく絵以外では、かくことをはばかるような雰囲気さえなっていることも現実なのである。

このようなギャップはなぜ生じているのだろうか。造形教育を専門とする一人として、このことに責任を感じ、児童は本当は太陽をかきたいと思っているということと、その正当性を証明し、不当な圧力干渉を与えている父母や教師に、警笛を鳴らさなければならぬと考えたのがこの小論を取り組もうとした動機である。

調査と考察(1)は、そのためのものであった。結果の詳細は既にその項で述べたが、この項の冒頭でも事実として数値の一部を挙げた。要するに、期待していた通り、児童は太陽を絵の中にかくことを好むというもので、その数値は、理解できない程の高い数値で、嬉しい驚きであった。

しかしこの結果は、ある程度予感していたものでもあった。それは幼児及び児童の「生きる」条件・方法・感動・向上の基盤は「行動」であり、そしてその行動を支えるのは「場」であり、そして更にこの「場」を場として機能させるのが「太陽」だからである。このように、「生きる」根源にあるのは「太陽」である。この生きる根源に執着を持ち続けることに何の不思議があるのだろうか。そしてそれを絵の中にかくことがなぜいけないのだろうか。いや太陽は、人類が生きる根源的要素であり、敬愛の象徴である筈なのだ。

この執着を如実に現したのが、5年、6年の「太陽をかきますか」の問いに答えた64%、66%の数値であろう。5年、6年の児童は、実際には絵の中にこのように多くは太陽をかいてはいないだろう。それでも太陽への執着からこのように「かく」として反応してしまうのであろう。このような意味と事実から、児童が絵の中に太陽をかくことへの教師及び父母の無理解を排し、「児童に自由に太陽をかかせる勧め」を声高らかに主張したいと考えるのである。

(2) 児童が太陽をかくことに干渉することの不当性

表5、6、7は、「えのなかにおひさまをかいて、せんせいやおうちのひとに、なにかいわれたことがありますか。」という問いに対しての児童の答えである。考察については調査と考察(2)で済ませているが、この項との関係で問題となるところを改めて取り上げてみる。

問題点は、表5における数値で、「ある」がいささか少な過ぎるのではないかということである。先の考察でその少ない分は、「無回答」に入っていないかと指摘したが、少ないことも問題だが、もしその分が無回答に入っているとしたら、それも問題である。というのは、このような結果になるのは、児童が絵の中に太陽をかく時の父母や教師の助言に、素直に納得できないものがあるからではないだろうか。

次のような調査がある。小学校教師5人(男-2, 女-3)と父母5人(男-1, 女-4)に、「子供は絵の中によく太陽をかきますが、これが中学年高学年と続いてかくのを見たとしたら、これに対して何か言いますか」①言うとしたらどんなことですか。②それはどうしてですか」というような調査である。

①についての答、・おかしからもう止めたら(父)、・いつまで太陽をかくの(父)、もう太陽をかくの止めたら(教・男)、・いつまでも太陽かいて赤ちゃんばいね(母-4人)、・幼稚園の子みたい(教女-2人)、・無回答(母1人, 教・女-2人)

②についての答えは、全員が無回答だった。

結果をまとめると、①については10人中7人が答え、その答えの内容は、男性は3人共「止めなさい」で、女性は「赤ちゃんばい」と「幼稚園の子みたい」の表現だが、意味は「止めなさい」ということだろう。そして②については(先にも述べたが)無回答だった。

このミニ調査の結論は、教師も父母も、児童が絵の中に太陽をかくことへの干渉の裏付けは、何も持ち合わせていないということである。また、同じことを個別的に調査した結果も、このミニ調査とほとんど同じ結果だった。先に、児童は教師や父母から受ける太陽をかくことへの助言に、納得できないものがあるのでは、と述べたが、このような理由なき判断による助言には、「納得できないのも当然」といえるだろう。つまり、児童が太陽をかかないではいられない心情を理解もせずに、何の意味づけもないままに、ただ慣習的な「赤ちゃんばい」という判断によって、「かかないほうがいい」という干渉は、不当だからということである。

(3) 児童の創造的活動を促す太陽

児童が意欲的に創造的活動をする条件としては、①興味・関心のあるモチーフであること、②活動の程度が発達段階に即していること、③工夫・創造によって発展性のある課題であること、④表現効果が著しく表現活動に

満足感が得られること、などがあげられる。

おひさま(太陽)というのは、絵画的表現としては、このすべてに該当する。①については、既に調査考察したことを通していえる。②と③については、1年は1年なりに、6年は6年なりに工夫表現できる。④については、調査と考察の(3)-③に作例を通して具体的に説明した通りである。このように、太陽は、児童の絵画的表現のモチーフとして、得難い条件を持ち、児童の創造的活動を促すものであるといえるのである。

なお、この「得難い条件」として強調しておきたいのは、児童の並々ならない「思い」である。このことは、既に調査と考察のところで再三述べてきたが、特記しておきたいことは、児童は自分がかく絵の中だけで太陽に執着するものではなく、他の絵の中にかかっている太陽を見ても、それぞれの意味を持ってそのよさを味わっているということである。したがって、この「思い」を尊重し、児童の創造的活動に生かすべきであろう。

(4) おわりに

この調査研究を進めてきて、遅きに失したという気がする。それは、児童の太陽への思いや、児童が太陽をかくことに対しての教師や父母の干渉の実態を知り、その実態に教育的に重大な問題を含んでいると思うからである。このことは、予測していただいただけに残念である。

それにしても、この調査研究には不備な部分も多い。その一つに、児童が絵の中に太陽をかくことに対して、教師や父母がどのように考えて助言的干渉をしているのかの調査が不十分である。また、児童が太陽をかく思いや、かいた後の思いを詳しく述べる必要があろう。

今後は、不備な部分を補いながら、①太陽図形の発生、②児童のかく太陽図型の様式、③太陽をかくことと表現効果との関係、などを課題としながら研究を進めたいと考えている。

最後に、この研究の構成や視点などをご指導くださった本学の山内昭道教授に感謝の意を表したい。

参 考 文 献

- 1) 美術による人間 V. ローウェンフェルド著 黎明書房、竹内清、堀内敏、武井勝雄共訳 昭和31. 8
- 2) 児童画の発達 ローダー・ケロッグ著 黎明書房 深田尚彦訳 昭和46. 6
- 3) 絵による児童診断法 扇田博元著 黎明書房 昭和33. 9

熊田 藤作

- 4) 造形心理学入門 本明寛著 美術出版社 昭和37. 5) 図画工作 熊田藤作著 小学館 昭和61.10

1

- アンケート協力校, 東京都豊島区立高南小学校